

第53回  
平成29年度「わたしの教育記録」  
新採・新人賞受賞作品楽しみながら書く力を育てる  
ことをめざして

— 初任4か月の実践 —

大阪府大阪市立新高小学校教諭 松井 香奈

初任として担任した二年生。見つけたことや思ったことを発表することに意欲的な子どもたち。新しい漢字を喜んで覚え、習った漢字は、使ってみたい、書いてみたいと積極的に勉強しようとする子どもたち。一方で、考えたことや見つけたことを自分の言葉で書くことに抵抗があり、手が止まる子どもや書きたくないと投げ出す子どもがいました。

子どもたちに、自分の思いを素直に書いてほしい、また、書いたことを伝え合うことで子どもたちどうしのつながりも豊かになってほしいと考えました。そこで、次のような手立てを取り入れれば、書くことができる子どもたちを育てられるのではないかと考えました。

(1) 学校生活全般を通じて書く場を設け、書くことに親しむ

書くことを授業の中で位置付けたり、子どもたちの活動の中に自然な形で取り入れたりする工夫を行い、書く機会を多く設ける。その際に、子どもたちにとっての書くことの必然性や必要感を大切にします。

(2) クラスの仲間の書く姿に学ぶことで、書くことへの意欲を高める

クラスの友達が書いたものを紹介したり、掲示したりすることによって、何をどのように書けばよいのかに気付けるよう支援し、書く意欲

を高める。

(3) 書くことが誰かの役に立ったり、喜ばせたりすることを実感する

書くことが、クラスの仲間とつながったり、結びついたりするよう工夫する。また、そこでの達成感や成就感を大切に、書くことへの意識を高めていく。

## 1 「見つけたよカード」の実践

(1) 子どもたちが子どもたちから学ぶ

生活科「春見つけ」の学習では、見つけてきた春の宝物を観察カード「見つけたよカード」に書きました。一文を書くのがやっとな子や書けずに手が止まっている子に、どう指導をしていけばよいだろうかと考えました。

そこで、一枚目に書いた「見つけたよカード」を黒板に貼りだし、何と比べて大きいのか、持ったときの重さや色、また、見たときに感じたことや思ったことなどを取り上げて話し合いました。

子どもたちは、友達のカードから学んだことがたくさんあったようです。二回目のミニマトの「見つけたよカード」には、色や形などが詳しく書かれていました。そこで、国語科の授業でもどんな視点で書いたらよいのかを考えさせ

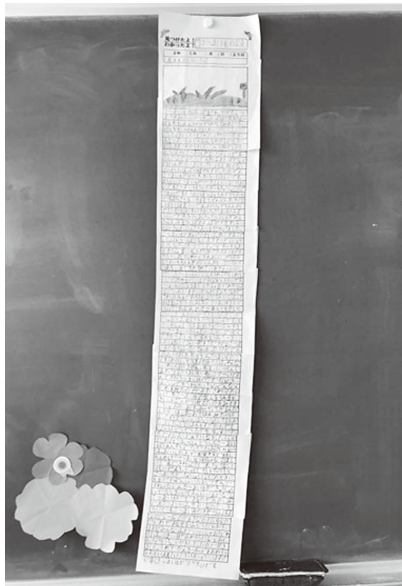


図2 11枚も書いたAさんのワークシート

(2)書くことができるようになったBさん  
Bさんは、文章を書き写すことは得意ですが、自分で考えて文章を書くことが苦手でした。「春見つけ」の学習で、カードに何を書けばよいのか分からないと教師に訴

えてきました。そこで、Bさんの隣でキャベツの色はどうだったか、どこで見つけたのか、キャベツを見て思ったことは、などの声かけを繰り返し、答え

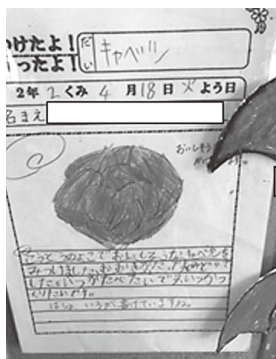


図3 1回目のワークシート

自分で絵を描  
3回目は、  
4。

確認しながら、文章も教師と共に書きました(図



図1 観察のポイントの整理

こうした  
指導が功  
奏したのか、  
Aさんは、  
カードが足  
りないと申  
し出てきま  
した。1枚

ポイントをま  
とめました  
(図1)。  
とめま  
した  
ポイント

3回目からは、カードの枚数を選んで自分が書きたいだけ書く子どもの様子が見られました。黒くなった手の甲を見せて写真を撮ってほしいと、見せる子どももどんどん増えていきました。当初は、大きさを比べるものが、手や消しゴム、定規だったのが、育てているヒマワリや家のミニトマト、サツマイモなどに徐々に変わっていきま

目のカードに2枚目のカードを貼り付けて長くしたところ、Aさんは手の甲を真っ黒にして書いていました(図2)。終わりの会で手の甲が真っ黒になったことと書いたカードを紹介しました。子どもたちからも、すごいと声があがりました。森川正樹先生(関西学院初等部)が紹介されている、真っ黒になった手の甲を写真撮影(※)したところ子どもたちはさらに書くことに意欲的になってきました。

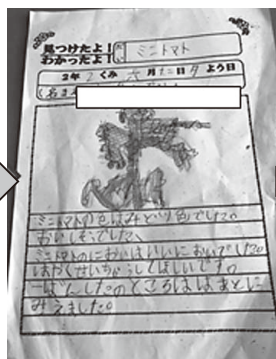


図4 2回目のワークシート

こともしぶりが嫌にな  
っているよう  
でした。Bさ  
んの隣で、ミ  
ニトマトの茎  
やその色など

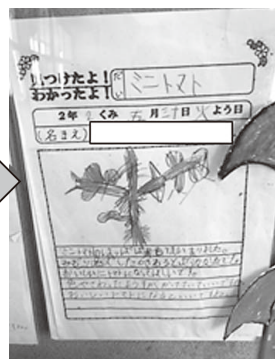


図5 3回目のワークシート

分でミニトマ  
トの絵を描く  
カードを書く  
ことが嫌にな  
っているよう  
でした。Bさ  
んの隣で、ミ  
ニトマトの茎  
やその色など

えてきました。そこで、Bさんの隣でキャベツの色はどうだったか、どこで見つけたのか、キャベツを見て思ったことは、などの声かけを繰り返し、答え

くものの、色塗りは教師の支援が必要でした。ところが、トマトが少し育ったことのうれしさや実感もあったのか、今まではトマトに対する願いはないとの返答だったのが、おいしいミニトマトになってほしいとの返答があったのです(図5)。

4回目は、教室にやってきたザリガニだから、教室で書いたことがよかったのか、一人で絵を描くことができました。生活科の時間では仕上げる時間が間に合わず、休み時間も使って書く姿がありました。Bさんには、自分でも手応えがあったようで、教師のデジカメで自分の観察カードを撮りたいと言ってきました。そこで、自分で言葉も書いてみないかと提案しました。使った漢字をドリルなどで調べながら、丁寧に書くBさんがいました。しかし、一文(二

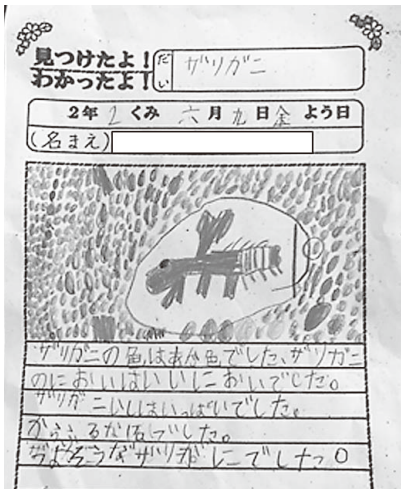


図6 4回目のワークシート

行)しか書けないと言っていたので、前の観察カードよりも長く書いてみないかと促してみました。目標が自分の中にでき、5行を自分で書くことができました(図6)。それからは、自分の書いた前の観察カードよりも多く書くことが自分の目標になっていたように、一人で自分の思ったことを書けるようになりました。

## 2 国語科『お手紙』をきっかけに

教師の机の上にお手紙を置いていってくださる子どもや、友達やお家の人にお手紙を書く子どもなど、日常でも書く活動を見受けることはあります。そこで、子どもにとってより身近であるお手紙に着目し、書く活動を充実させたいと考え、『お手紙』(東京書籍2年生上)の教科書教材を活用することにしました。学習が始まる1か月前から、教室にかえるくんとがまがえるくんの人形を持ち込み、一緒に生活をする中で、子どもと主人公の交流の中から言葉を引き出すことを考えました(図7)。

教室に人形を持ち込んだ時、子どもたちからは、教科書に載っている子と同じだとの声があ



図7 5月の二人

りました。子どもたちは、かえるくんとがまぐんに、机とイスを用意したり、名札をつけたりと、クラスの一員として歓迎してくれました(図8)。

授業では、二人の思いを読み取りながら学習は進んでいきました。その際に毎時間、すべての子どものふり返りをノートに記録しました(図9)。こうして、子どもの読みを追った結果、読みの深さの違いや思いに気づかされることがありました。初読の感想でCさんは、5場面「2人とも笑顔がいい」と書いていました。授業が終了した時のふり返りでは、好きな場面に對して3場面を選んで、「かえるくんががまくんのために、ずっとまどをみているのがとてもいいと思いました。」と書きました。

Dさんは、休み時間に入ってもノートを書く



図8 6月の二人

ほど、自分の思いをなんとか書こうとこだわっていました。特に、なぜ題名は『お手紙』なのか、『手紙』ではダメなのかという授業のふり返りには、「学校の手紙はお知らせで、かえりくんの手紙はがまくんがよろこぶような手紙だからちがうんです。」と書きました。これは、Dさんが授業の中で読み取った思いの表れです。授業では、学校のお手紙は、みんなに書いているお知らせだから手紙って言うてるけど、このお手紙はがまくんのためにかえるくんが書いたから手紙ではだめだ、というようないろんな意見が出ました。手はあげないものの熱心に話を聞き、誰よりも体を話す人に向けて聞いていたのは、Dさんでした。特に、手紙の大切さ

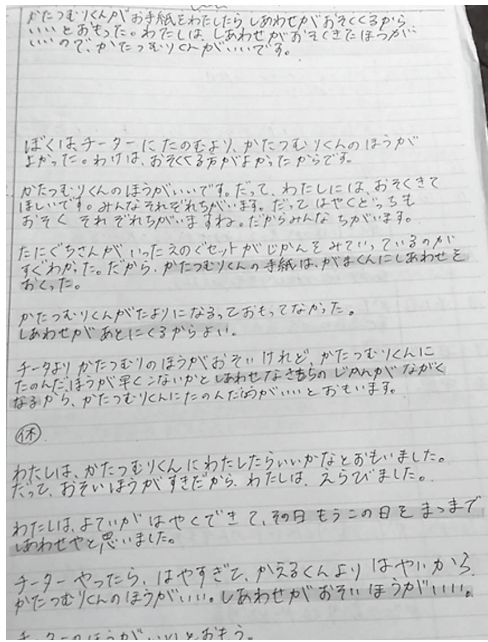


図9 ふり返りの記述

初は、怖がって誰も触ろうとせず、教師が世話をしています。その様子を見ていた子どもたちからお世話したいとの申し出がありました。ザリガニへのすみかの置き方を考えたり、餌をやる頻度を話し合ったりすることを通じて、愛着を深めていきました。中には教師宛にザリガニの様子を手紙に書いてくれる子もいました。毎回同じメンバーがお世話をしていることが続き、子どもたちからこのメンバーでザリガニ係として、活動したいと申し出がありました。紙に書いてみんなにザリガニ係をすると伝えたらどうだろうと提案すると、休み時間に集まって係活動の紹介カードを作っていました。自分たちで考えた係だからと、教師の用意したカード

### 3 係活動を通じて

を考える場面では、手紙に込められた思いを読み取ることができたようです。係活動を開始した当初は、決められた仕事をすることが係の仕事だと子どもたちは思っていました。そこで、係活動の時間を用意し、子どもの必要感を引き出すことを繰り返す中で、自分たちで生活に必要な係を作り始めました。例えば、ザリガニの飼育を始めた当初は、怖がって誰も触ろうとせず、教師が世話をしています。その様子を見ていた子どもたちからお世話したいとの申し出がありました。ザリガニへのすみかの置き方を考えたり、餌をやる頻度を話し合ったりすることを通じて、愛着を深めていきました。中には教師宛にザリガニの様子を手紙に書いてくれる子もいました。毎回同じメンバーがお世話をしていることが続き、子どもたちからこのメンバーでザリガニ係として、活動したいと申し出がありました。紙に書いてみんなにザリガニ係をすると伝えたらどうだろうと提案すると、休み時間に集まって係活動の紹介カードを作っていました。自分たちで考えた係だからと、教師の用意したカード

### 4 「ノート名人」を通して

このように、子どもたちは自分たちの生活の中で必要な役割である係活動に取り組みことで、自然と書くことが生まれてきています。一学期の初めは、ワークシートを使って授業を行っていました。しかし、ワークシート前提の授業では、子どもの思いや願いをもとに授業を展開することに限界がありました。そこで、ノートを使って授業を進めることにしましたが、ノートを取ることに子どもたちが慣れておらず、どのようにとってよいか分からない様子でした。ふり返りの時間を用意し、クラスの子のノート

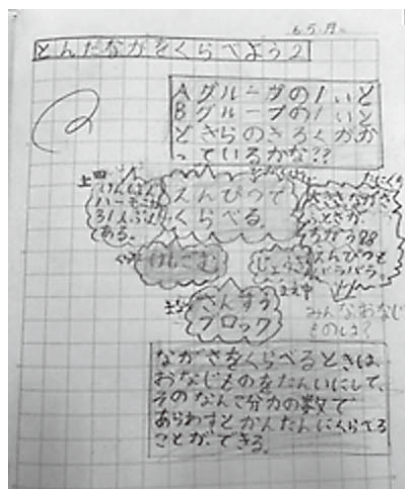


図10 みんなが選んだノート

を見回る時間をつくって、子どもたちにどんなノートが見やすくてわかりやすいのかを伝えました。すると、色や書き方にそれぞれ自己流が生まれてきました。

もっとクラスにそのよさを広げたいと「ノート名人」をつくり、掲示しました(図10)。書くことに慣れ始めたこともあり、自分のオリジナルノートをくろうと必死に工夫しながら書いていました。算数と国語では、黒板に発言した子の名前を書いていたので、発言がよい等のコメントをノートに書く子どももいました。

## 5 子どもたちの姿容と今後の課題

### (1) お手紙を書きたい

『お手紙』の学習後、手紙を書きたい気持ち

子どもたちから伝わってきました。そこで、「お便りボックス」を設置し、教師に手紙を書くことを提案してみました。

次第に、教師への手紙から友達やみんなへとお手紙が広がり始めました。体育係からは、プールが始まることとその時のお知らせが届き、図書係からは、後方の紹介カードを読んでほしいというお知らせなど、みんなへのお手紙にも変化が表れてきました。子どもたちの書きたいという気持ちに合わせることで、書く活動が充実できることがはつきりしました。

### (2) 書くことの抵抗感が少なくなった

子どもたちに書く課題を出すと、書くのが楽しい、書きたいという思いが強くなってきます。例えば、音楽の鑑賞の時間では、一枚の紙では足りずに、何枚も書く子どもが見られました。国語科の「じゅんじょよく書こう」では、教師の用意していた作文用紙がなくなるほど、楽しんで書いていました。枚数を多く書くことが、子どもの書いた、書けたという実感になっているようです。授業の時間内に、何枚も書く姿があることから、書くスピードも上がってきました。

### (3) 意欲や関心の高まり

書くことが苦手なBさんにも、書くことの必然性が生まれてきました。ザリガニの観察カー

ドが自信になり、自分でミニトマトを書くとき意気込んでいました。実際に自分の書いた観察カードを横に置いて前よりも書く、と紙いっぱい書くことができました。一学期のふり返りを書かせると、生活科に「◎」を書き、「ザリガニを頑張って書いた」とふり返っていました。書けたことが自信になったようでした。国語科の「じゅんじょよく書こう」では、初めは書くことがないと叫んでいたものの、やりとりをする中で好きなゲームについて書こうと決め、1枚の作文用紙に一人で書いてもってきました。

また、ビー玉係を立ち上げて、リーダーになつてくれました。みんなにビー玉貯金のことをどのように伝えるかを考えて、ポスターにしようと思いついた様子で、一人残って「ビー玉さくせん」について書いてくれました。みんなにわかるどころと言って教室の扉の横に貼りだした紙は好評で、クラスの子たちが立ち止まって読んでくれている様子にBさんも嬉しそうでした(図11)。

### (4) 書くことで子どもと子どもがつながる

当初は、子どもたちは相手を意識することなく書いている様子でした。実践を通じて、相手に読んでもらったり、クラスのみんなに伝えたりする中で、次第に相手意識が生まれてきました。分かりやすい表現や色の使い分けなどを子

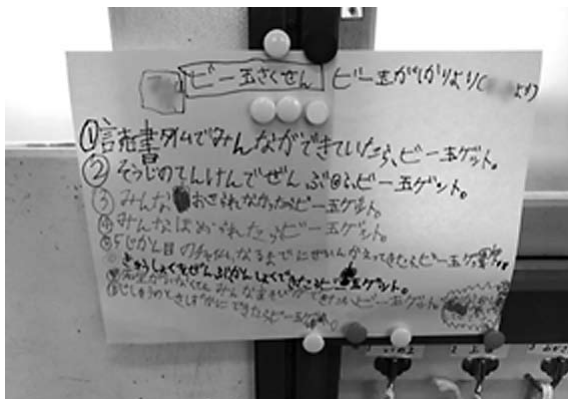


図11 ビー玉係のお知らせ

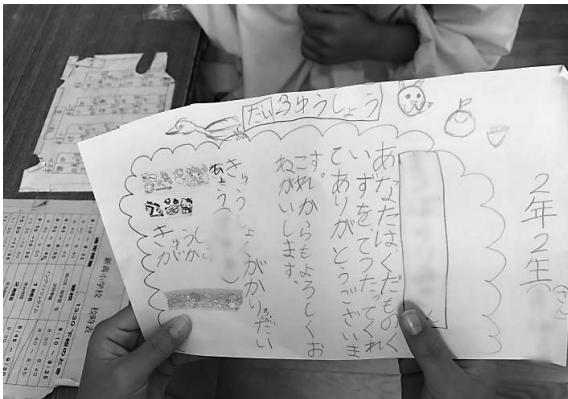


図12 給食係からの賞状

どもたちが自分で考えながら試していました。こうして書くことで生まれてきた相手意識は、クラスの仲間への意識へと高まってきました。例えば、給食係はたべものクイズに正解した人へ表彰状を作って渡したり、新聞係は誕生日の子へカードを作成し渡したりと、クラスの仲間を喜ばせたいとの思いを原動力に、書く活動が自発的に生まれてきています(図12)。

(5)自分たちの生活をつくる

ビー玉係を立ち上げたBさんは、帰りの会を使って、「一緒にビー玉係をしてくれる人はいませんか」と問いかける姿がありました。そこ

(6)課題

からは、何をするのか、何人までかとクラスのみんなからの質問がありました。前日までに仕事内容と4人までと決めていたBさんは、得意げに答えます。15人近くもしたい子がいたので、Bさんはわざわざ教師にビー玉係を決める時間が欲しいと言ってくれました。

書く量を意識してきたために、文字が丁寧でない子も見られます。あるいは、多く書くために途中から書いている内容の浅さもあります。今後

書く量を意識してきたために、文字が丁寧でない子も見られます。あるいは、多く書くために途中から書いている内容の浅さもあります。今後

受賞の言葉

松井 香奈



このたびは、新採・新人賞という名誉ある賞をいただき、ありがとうございます。全力で駆け抜けた初任の4か月間をふり返り、今後の実践につなげたいと、書く指導を通した子どもたちの成長をまとめました。それが新採・新人賞をいただく結果となったことを心から喜んでいきます。

子どもたちが楽しんで書くことができるようになってほしいと始めた取組でしたが、いざ、始めてみると私自身の子どもへの向き合い方が大切なんだと気付かされました。日々成長する子どもたちの姿を記録に残し、子どもたちの意欲や思いを引き出せる活動を探す教材研究など指導を模索する中で、書くことがお互いを認め合い、子どもたちをつなげる意味があることに気づかされました。子どもの思いや願いをていねいに見とること、子どもを待つこと、そのために教材への深い理解が必要なことを子どもたちから学ぶことができました。

子どもたちの前に立つようになって8か月が過ぎました。様々なことを教え、導いてくださる勤務校の先生方と、学ぶために生まれてきたような二年生の子どもたちに感謝の気持ちでいっぱいです。私の教師人生は、始まったばかりです。今回の受賞を励みとしてこれまで以上に努力しようと誓っています。

は、子どもの書きたい思いを消さずに、丁寧な字で書くことの大切さ、書く内容の深さを大切にさせたいと考えています。書くことで、自分の思いや考えをふり返ったり、気づきが生まれたりすることのよさに目を向ける指導を今後も重ねていきたいと思えます。

(※)森川正樹(2010)『どの子も必ず書けるようにする国語授業の勘所―「つまずき」と「ジャンル」に合わせた指導』明治図書